対魔忍
コテガワ
改造編

あらすじ という名の手抜き

彩南高校から突如妖魔があふれ出た。

難を逃れた古手川唯たちは遅刻してきた
ララに会い、結城リトとモモ、ついでに校長が
行方不明であることを知る。

ララの発明品で妖魔退治専門の現代忍者、
対魔忍に扮した古手川は妖魔によって乱された
学校の風紀を取り戻すべく立ち上がった!

◆

校内に蔓延る屈強なオークを容易く屠る古手川。
このまま妖魔の発生源に突入して元凶を倒せば
事件は解決するはずだった…

しかし古手川の忍者刀を植物の触手が絡めとり、
いともあっさり拘束されてしまった!

取り囲むオークたちの奥から静かな笑みを携え
登場したのは、“ダークネス”に憑りつかれてしまった
モモの姿だった。

凌辱劇はここから始まる…

モモに捕まった古手川は見たこともない植物が
無数に繁殖して、すっかり様変わりしてしまった
生物室に連れてこられた。

　袋の中に触手が無数に生えた気味の悪い植物に
手足を固定され、モモの前にX字に磔にされる。
　何かは分からないが甘ったるい匂いのする煙が
部屋中に立ち込めていた。

モモ
「良い格好ですよ、古手川さん」

モモの声は落ち着いていて顔はいつものように
笑顔だった。とても妖魔を従えて学校を占拠し、
あまつさえ知り合いをグロテスクな植物を用いて
磔にするようには見えない。

古手川
「モモちゃん、どうしたの？あなたがこんなことを
するなんてとても思えないわ」

するとモモはスッと目を細め、口元の笑みを
よりいっそう深くした。

モモ
「わたし、気づいてしまったんです…」

モモの声はやはり落ち着いていた。
しかし先ほどとは違い、得体のしれない不気味な重みが含まれている気がした。

モモ
「ハーレムって、メス豚がいればいいんですよ」

古手川
「えっ・・・・・・ぶ、ぶた？」

モモ
「はい、メス豚です。これまで理想的なハーレムの形態は何か、あらゆる状況を想定して思考実験を繰り返してきましたが、ようやく１つの答えにたどりつきました」

古手川
「答え・・・？」

モモ
「王１名に対し女王が１名、そして追加も処分も
可能で謀反を起こさず要求もしない従順なメス豚！
これ以外に大人数のハーレムを長期間安定に形成
することは不可能なんですよ！！」

古手川
「な、何を言って・・・・・・」

古手川は様子のおかしいモモの姿に寒気を感じた。

モモ
「あなたのおかげですよ古手川さん」

古手川
「何のこと・・・？」

モモ
「あなたのそのハレンチ極まりないドスケベな身体、
まさにメス豚という名にぴったり♥ その駄肉が
メス豚ハーレムエンドのヒントになったんですよ。
光栄に思ってください」

古手川
「なっ・・・!?」

モモ
「でもまだ足りません。古手川さんのハレンチボディ、
リトさんが絶望するくらいに立派でみだらなメス豚に
わたし自ら改造してさしあげます♥
まずは・・・」

古手川
「きゃあっ!?」

生物室の植物はモモの思考を読み取るかのように
葉っぱカッターを飛ばし、肌を一切傷つけることなく
対魔忍スーツの胸の部分だけをきれいに切り取った。

それまで薄布一枚で隠されていた古手川の乳房が
モモの前にまる出しにされる。

モモ
「相変わらず大きくてきれいなお乳。あまりにも
魅力的だから最初は切り落として、ぐちゃぐちゃに
料理して校長のエサにしようかと思いましたけど、
せっかくなのでメス豚用に改造しちゃいましょう♪」

モモが手上げると植物に覆われた生物室の壁から
２本の触手が伸び出てきた。その先端には丸いコブと
鋭い針がついており、生物の血管のように浮き出た太い
葉脈がドクドクと波打っていた。

触手の先端の針が巨乳の先端の乳首を捉えと、
古手川は原始的な痛みの恐怖に身をこわばらせた。

モモ
「クスクス♪安心してください。メス豚になったら
すっごく下品な乳首ピアスをプレゼントしますよ」

ぶちゅん

古手川
「・・・っ！」

触手の先端の針が古手川の乳房に突き刺さり
強烈な痛みを発生させた。
コブの中に格納されていた何らかの冷たい液体が
胸の中に入ってくる。

本来なら身体に針を刺され、得体のしれない液体を注入されることは、泣き叫んで暴れてもおかしくない事態である。しかし古手川はそうなることなく、気丈にも加害者のモモを睨み返した。

ララの作った対魔忍スーツには、ふつうの女子校生でも簡単お手軽に妖魔相手の殺戮行為が行えるよう精神に干渉する機能があり、多少の負傷で着用者が取り乱し窮地に陥ることを抑制しているのだ。

モモ
「うふふ♥ 大切なおっぱいを串刺しにされて
冷静でいられるなんて・・・。これはメス豚に
堕とし甲斐があります♥」

ちゅぷん。

古手川の乳房から触手針が引き抜かれた。
乳首や乳輪に穿たれた穴は急速に閉じて、
きれいな乳肌があっという間に再生される。

古手川
「・・・何をしたの？」

古手川の声が恐怖と抑制の狭間でゆれた。
いかに精神安定を強制されようと、物質の物理的な移動と化学反応に根ざした人間の精神を外的要因で完全に操ることは至難の業だ。

では完全に従順なメス豚に堕とすにはどうするか？
簡単だ。
物理的な改造を伴う洗脳である。

モモ
「古手川さんのおっぱいにはＤＮＡを直接弄って
都合よく改造した植物の種子と発芽に必要な養分を
注入しました。あっ、成長に必要な栄養は手足から
点滴されるのでご心配なく♪」

古手川
「植物・・・？
えっ、な・・・なにっ!?」

それはすぐに始まった。

古手川
「うっ…！くぅ…っ!!ど、…どうなってるの!?」

乳房先端のちょっとした違和感。
次いで訪れたのは、胸の中で何かが急激に大きくなっていく恐怖だった。乳房を形成している組織を内側からこじ開け、蝕むように蹂躙されていく。

低温で保存されていた種子は古手川のおっぱいの中で温められ、跳ねあがった反応速度に従い発芽、根が乳肉と一体化して血管から栄養素を調達して急成長をはじめたのだ。

古手川
「い、痛いっ・・・・・・あ、あつっ、痛っ、・・・熱いっ！
っく、いぎぃ・・・いやぁあああああああっ!!」

モモ
「大丈夫ですよ。反応熱は自主回収するので
火傷するほどの高温にはなりません」

モモの説明は乳房の中を掻き回されている
古手川には届かない。例えるなら乳房の裏側を
熊手で引っかくような痛みだ。一般人が長時間
耐えられる代物ではない。

だから痛みはすぐに消え去るように調整されていた。
そして代わりに現れたのは・・・

古手川
「くっ・・・？
・・・・・・な、何よこれ!?」

一回り大きく成長した乳房。
古手川はずしりと重く大きく成長した自分の乳房に困惑した。もう痛みどころか違和感もない。
正真正銘、巨大化した自分の乳房だった。

モモ
「うふふ♥ よかったですね、実に立派なメス豚おっぱいですよ。自分で揉むもよし、知らない男に使わせるもよし、校長のチンポを挟んでしごくもよし。万能じゃないですか！」

古手川
「も、戻しなさいよ！」

モモ
「無理ですよ？細胞壁も葉緑体もない植物細胞は
もう古手川さんから分離できないほどもともとの
細胞と混ざりあっているんです。
古手川さんは一生そのメス豚お乳のままです♥」

古手川

「そんな・・・。
こんな大きな胸・・・」

自身の乳房を見下ろしぽつりと嘆く古手川の
姿に、モモは呆れたように溜息を吐いた。

モモ
「やれやれ・・・
何か勘違いしているようですね古手川さん？」

古手川
「え・・・？」

モモ
「バストアップは副次的な作用です。もともとは
ド貧乳のナナのおっぱいを大きくしてあげようと
作っていた粗品ですので巨乳化はしていますが、
まだ常識的な大きさの範囲でしょう？」

モモ
「まぁ、本当の効果は性器や肛門の改造と一緒に
堪能しちゃってください♥ そろそろ催淫ガスも
聞いてくる頃合いですし」

モモは生物室の壁をガツンと蹴り上げた。
すると植物の壁が怒ったように蠢いて、
地面から古手川の股間に目がけ触手が伸び出てくる。

古手川
「ま、待って！またあれをやるの!?
せ、性器と、こ、ここここ、肛門!?
い、いやっ！助けて！お願い！
許してモモちゃんっ!!」

古手川の懇願虚しく、対魔忍スーツの性器と肛門を
覆い隠していた薄布が植物によって切り取られた。
空気にさらされた陰部に悪寒と恐怖を覚えずには
いられなかった。

モモ

「わたし思うんですよ。メス豚はチンポの
ことだけ考えていればいいって・・・」

古手川
「うぎぃいいいいいっ!!」

古手川の性器の割れ目を捲った触手が
クリトリスに針を刺し、種と養分を注入した。
部屋に立ち込める煙の効果も相まってか、
見る間に乳首が勃起して頬が上気する。

モモ
「そしておチンポを突っ込まれたり、
おっぱい揉まれたり、お尻を叩かれたり、
あそこをちょっと触られただけでも、
よがり狂って腰を振るべきです♥」

古手川

「いやぁああ・・・っ!!」

古手川の肛門にねじ込まれた団子形状の触手が
直腸を見たし、そこから無数の針が飛び出て直腸
粘膜に種と養分を注入した。

モモ
「感度１０倍とか１００倍とか、聞こえはいいですが
意味が分からない設定です。痛いだけですからね。
やるんならこうしておっぱいとオマンコとアナルを
好みにいやらしく、鮮度を保つように改造して・・・」

古手川

「いひぃいっ！･･･痛っ！熱っ！」

性器と肛門の種子が発芽し、男を喜ばせるもの
へと成長させていく。
さらに天井から別の触手が２本下りてきて
それぞれが古手川の左右の耳に狙いを定めた。

モモ
「信号を解釈する脳をぶっ壊さないと
ダメですよね♥」

古手川
「いやぁあぁぁっ！……あふっ、…んごっ！」

ごりごり、ごりり・・・
じゅぽじゅぞぞぞ・・・
ごりゅ・・・
ぬぽ・・・ぬぽ・・・

古手川は自分の頭が壊されていく音を聞いた。
頭の中を細い触手が這いずり、的確な箇所を破壊し、
本来再生しないはずの神経細胞を次々と結合させて
古手川の脳に新たなネットワークを構築していった。

人格を壊さず、生殖器や身体からの信号を
メス豚としてふさわしく処理をするように。
その作業は永遠に続くかのように感じられたが、
終わりは唐突に訪れた。

古手川
「あ・・・・・・、あ・・・・・・、んぉ・・・・・・、
ん・・・・・・、ん・・・、あ・・・、あ・・・、
ん、ん、ん、ん、あ、
んぁへあぁあああああっ！」

ぶしゃあああああああっ

モモ
「あら？思ったより早かったですね。やっぱり
古手川さんにはメス豚の才能がありそうです♥」

古手川の肥大化した乳房からは白い液体が噴き出していた。乳房に埋め込まれた母乳を噴出する機構と脳の母乳スイッチが接続されたのである。

モモ
「これで古手川さんはイクと喜んで母乳を噴き出す
ハレンチなメス豚♥ もちろん母乳をビュービュー
噴いていたら失血死してしまいますので、一体化
した植物がせっせと代替乳を貯め込んでくれます」

新たに追加された快楽処理神経系の刺激に
振り回される古手川は、モモの言葉を解釈し
きれずに、母乳を垂れ流しながら速やかに
意識を手放したのだった。

To be continued ...?